

平和な世界への第一歩

大在小学校 六年 松田 留実

「ピカッと百万ものマグネシウムをたいたような光に包まれ、その数秒後、世界が壊れるような爆音がとどろき、家のガラスが割れました。」

これは、原子爆弾が投下された時の様子を新聞社のインタビュで美輪明宏さんが語ったものです。この記事を見て私は、今まで被爆した本人の言葉をあまり聞いたことがなかったので、原爆の恐ろしさを知ることができました。

今年、昭和百年、戦後八十年という、日本が国を挙げて平和と向き合わなければならない節目の年です。日本では、第二次世界大戦中、争いによって苦しめられた人が多くいました。九州でも大きな被害を受けたことがありました。その攻撃の一つに、長崎への原子爆弾投下があります。父の生まれ故郷ということもあり、長崎について調べました。平和記念公園、如己堂、長崎市永井隆記念館、山王神社のクスノキ、片足鳥居など、長崎の平和に関する多くの施設を訪ねる中で印象に残った所があります。それは、長崎市永井隆記念館です。そこには、戦争が人々にあたえた苦しみ、被害、その後に芽生えた希望が広がっていました。特に深く共感した言葉に、「戦争は美しいものじゃない。」というものがあります。美しくないことよりも、美しい平和な世界をつくりたいと、私も思いました。

私のひいおじいちゃんは、原爆が投下されたその日、長崎市にいました。爆心地から4 kmほどはなれていたため、被害は少なかったそうです。しかし、元の目的地は川をはさんで向かいでした。風にあおられて今の爆心地になったのですが、風がなかったときを考えると、どうなっていたか分かりません。私はそのことを知り、原爆は人々のおだやかな生活を一瞬にしてうばう恐ろしい武器であり、遠い存在ではないと改めて実感しました。

ところで、日本が大きな被害をうけて終戦した第二次世界大戦はどちらの国が始めたのかを知っていますか。それは、日本なのです。日本が始めた争いによって、多くの人々が苦しんでしまうということが実際に起こってしまったのです。その事実、変えることができません。

では、今の私たちができることはなんでしょうか。私は、戦争のざんこくさ、平和の尊さを、次の世代へ伝えることだと思います。そして、日本があたえた苦しみのことも伝えていくべきだと思います。そのために、まず、私たちが知り、行動することが大切です。私も、平和にふれる機会があったことで知れたことが多くあります。このように、まず自分が知ることが重要なのです。八月六日の平和授業、修学旅行での平和学習のように、学校での取り組みから始めていくのも一つの手です。今、それらの平和学習が減っているということも聞いたので、より大切にすべきだと思います。

次に行動することは、平和について知り、学んだことをどう活かすかです。それは、ごく身近なことでのよいのです。友達と仲良くする。相手の気持ちを考えて行動する。そういった日々の小さな積み重ねが、やがて大きな力となり、争いのない世界を造る上で大切になるのです。そして、だれかに伝えることができれば、今から次の世代へ、戦争の記憶をつないでいくかけ橋に私たちがなれるのではないのでしょうか。私は、ペア交流をしている一年生たちに少しでも平和の尊さを感じてもらうため、修学旅行で学んだことを伝えてみようと思っています。そんな取り組みをすることが、いつまでも、だれもが平和な世界にする第一歩になると私は思います。